

TOBU

50-60年代、
B級ホラ-ム-ビー
上「吸血原子
蜘蛛」
下「父星の
不思議な
世界」



ウルトラマン第18話に
登場した「クモンカ」蜘蛛の特殊な
形状から怪獣映画では着目しては
操演(操り人形?)で使われることが多い。
ゴジラにもクモンカと名前のリアルな大蜘蛛が作られた。

蜘蛛の
ヒーロー
スパイダーマン

クモの一般の人のイメージは
無気味、気持ち悪い
怖い、得体の知れない
といったところ。
大阪の毒グモ報道で
ますますカオスな。

↓記念すべき
仮面ライダーの
第1号怪人
怪奇蜘蛛男
デザイン・造型
共に素晴らしい。



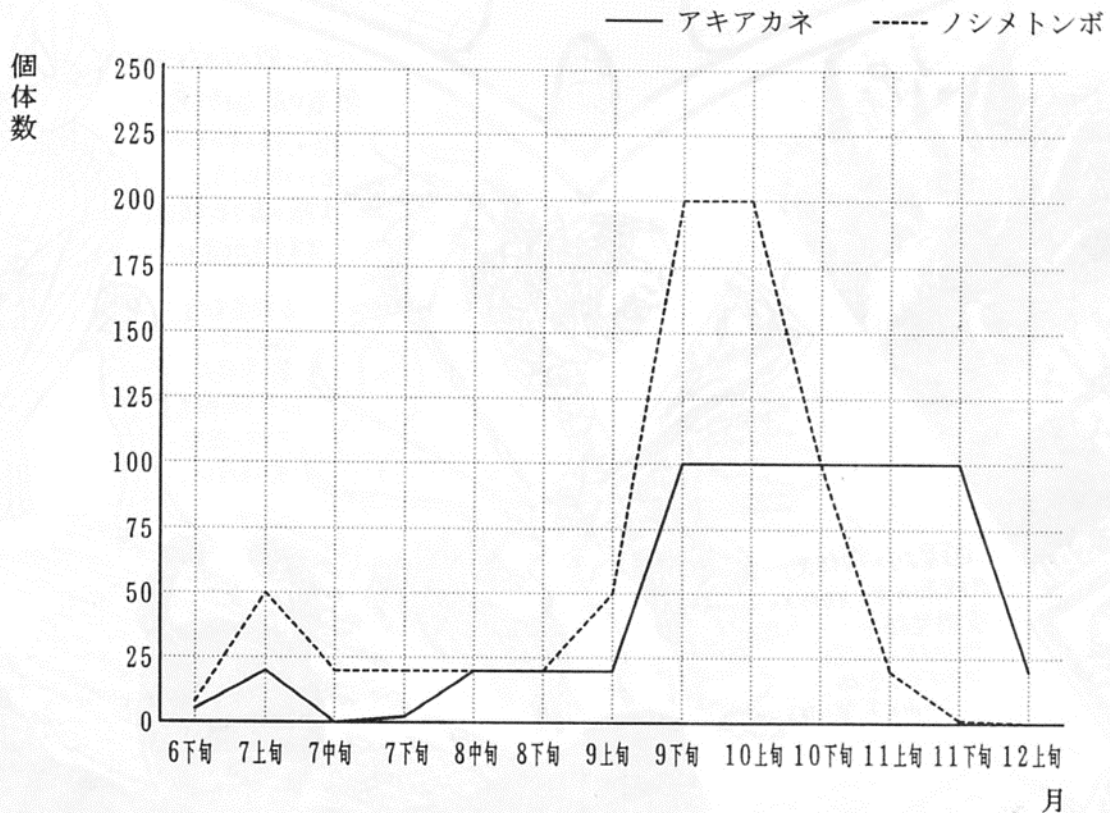
アカトンボに関する覚書

澤 田 博

《俵大池周辺のアキアカネとノシメトンボの個体数の季節変動》

俵大池は標高200m、金沢市俵町地内にあり、面積はおおよそ20,000㎡の中規模の池で、農業用の溜池として利用されており、周囲は、雑木林と水田に囲まれている。この池周辺にみられるトンボについて、1994年6月3日から1995年5月25日まで調査を行い、そのトンボ相については、既に報告した（澤田、1995）。

このときの観察メモから、周囲の水田および農道でみられたアキアカネとノシメトンボの個体数をグラフにしてみた（図－1）。ただしこの数は、調査方法も一定しない概数であって、おおよそそれ以上のトンボがいたことを示す数でしかないが、それでもだいたいの季節変動のパターンがみえるので、ここに書き留めておきたい。



図－1. アキアカネとノシメトンボの個体数変動

表紙デザイン：小 幡 英 典

今回の調査で最も早くアキアカネが確認されたのは、1995年5月25日の1個体であるが例外的に早い個体である。アキアカネは、夏には避暑行動をとり高所に移動するが、低所に残る個体もいると言われ、この調査でも7月10日を除き、わずかながらこの場所に生息している個体が確認された。アキアカネが急激に増加するのは9月の下旬になってからで、その後11月いっぱい多数の個体が常に確認され、12月に入ると激減した。

一方ノシメトンボは、1994年6月22日が初見で、それから一定数を9月上旬まで安定して見る事ができた。ところが、9月下旬にアキアカネに誘われるように個体数は爆発的に増加し、10月下旬までアキアカネより多い個体が観察され、11月に入ると急速に減少した。ノシメトンボは、成虫になってから未熟な間は、周囲の森林等に分散するといわれ、成熟すると生殖行動のために産卵場所に集合するようになり、その時期がアキアカネの生殖行動の時期と一致するということかもしれない。ノシメトンボは、アキアカネと違い高所で発見されることはなく、真夏でも平地にいるものが容易にみつかるが、やや高いところで避暑行動をとっているのではないかとされる集団もみつまっているようなので、若干高所へ移動を行ったものがアキアカネと共に、だんだん低地へ降りて来るのかもしれない。

《寝ころんで食事するノシメトンボ》

1995年10月15日、金沢市俵大池周辺の農道のコンクリートの上に1匹のノシメトンボがとまった。よく見ると、羽を広げて裏返しになって口にツマグロオオヨコバイをくわえ、6本の脚でおさえて食べているところであった。さらに見ていると、ツマグロオオヨコバイの上翅が1枚落ち、さらにもう1枚落ちたところで、口にくわえたままどこかへとび去った。

6本の脚を使えば、寝ころぶしかないとはいえ、あまりに無防備であり、あきれてしまった。

《乾燥したグラウンドに産卵するナツアカネ》

1995年10月16日、快晴の金沢市湊4丁目の港公園において、乾燥したグラウンドや、そこに生えている10cm未満の草にタンデムで腹部を打ち付けて産卵している10つがいはどのナツアカネを目撃した。

通常ナツアカネは、タンデムもしくは単独で水田の稲穂や湿った草むらに打空産卵し、稀に打水産卵するというが、上のような状態はいったい何であろうか。

《参考文献》

澤田 博, 1995. 金沢市俵大池周辺のトンボ相, (116):1-3.

《さわだ ひろし 〒920 金沢市石引1-16-11》

海岸で盛んに吸汁するアオスジアゲハ

松 井 正 人

羽咋市滝港で午後2時頃、波打ち際に打ち上げられた海藻から盛んに吸汁するアオスジアゲハを観察した。海藻はひとつが1～2cmの大きさで、波打ち際に厚さ10cm程のカーペット状に堆積し、まだ多数が波間を漂っていた。アオスジアゲハは新鮮な個体で、波打ち際近くで吸汁し、吸い戻しをしている個体も見られた。

海藻は湿っていたものの、直射日光で表面温度はかなり上昇しているので、体温を下げるための行動とは思われず、汁に溶け込んでいる塩類を摂取していたものと思われる。

この日は前々日までの大雨とは打って変わり、朝から晴れ上がる晴天猛暑の1日で、各地の海岸は海水浴客で賑わった。

1995年7月23日 羽咋市滝港 5頭目撃 松井正人

《参考文献》

小野克己, 1987. 海水を吸水していたキアゲハ, 蝶研フィールド, (14):34.

出嶋利明, 1992. 海水を吸いにきたナミアゲハ, 蝶研フィールド, (77):2-3.

《まつい まさと 〒920-01 金沢市大場町東871-15》

チョウ2種の採集例

富 沢 章

小松市において、記録の少ない種を採集したので報告する。

メスグロヒョウモン 1993年9月25日 小松市五国寺 1♀ 富沢 章 採集

本種は近年、ほとんど見かけなくなった。水田に接した林縁の日だまりに飛来したのを採集した。

ウラキンシジミ 1995年6月17日 小松市上荒屋 1♀ 富沢 章 採集

採集地は粟津温泉近くのコナラ、スギを主体とした二次林の中である。松井正人氏から教えてもらった県内の記録からみると、今回の記録はかなり早い時期のものである。

《とみさわ あきら 〒923 小松市大川町3-71》

大津市及び近郊のクロコノマチョウについて

諸道秀人

1995年7月、北方健作氏とキリシマミドリシジミを採集に行った帰路、大津市上田上桐生辻にて、登山道横のススキからクロコノマチョウの幼虫を8頭採集した。その後、いろいろな場所にて、かなりの個体を発見しているが、これまでこの辺りでは発見されていないので、最近分布を拡大しているように思われる。

幼虫は、谷筋にあるススキについているが、大きな株ではなく、1本から5本ぐらいの孤立した株に多い。林道や登山道の脇にある日当たりの悪いものが良く、1株に5～10頭の大きな幼虫が、派手な食痕を残している。若齢幼虫は葉裏にいるが、大きな幼虫は葉表にいて、その姿はまる見えなので発見は容易である。現在のところ、終齢幼虫でも寄生されたものは見えていない。

石川県に於いても、発見される可能性は高い。

1995年7月	滋賀県大津市上田上桐生辻	8 幼	諸道秀人
1995年8月14日	" " 葛川足尾谷	5 幼	諸道秀人・北方健作
1995年9月15日	" " 大石富川	1 幼	諸道秀人・北方健作
1995年8月13日	" 栗東町金勝寺	1 ♂ 目撃 1 5 幼	諸道秀人・北方健作
1995年10月10日	" 永源寺町茨川	1 頭目撃	諸道秀人
1995年9月15日	京都府宇治市原町大峰山	1 幼	諸道秀人・北方健作
1995年9月23日	" 宇治市陀羅谷	4 幼	北方健作

《もろみち ひでと 〒520-21 大津市一里山1-8-23》

1995年セミの遅鳴き記録

松井正人

今年は環境庁のセミ調査もあり、遅鳴きに注意していたが、遅鳴きとの思いから10月になるまで記録を付けずにいた。気がつくと、鳴いているのはツクツクボウシとチッチゼミだけで、その他がいつ頃鳴き止んだのかは皆目分からない。

ツクツクボウシ	1995年10月22日	金沢市柚木	声	松井正人
チッチゼミ	1995年10月28日	金沢市戸室山	声	松井正人

ツクツクボウシについては、かなり正確な日付だと思われるが、チッチゼミについては、標高500m程での遅鳴きなので、平野部や海岸部に生息するものはもっと遅くまで鳴いている事が予想される。

《まつい まさと 〒920-01 金沢市大場町東871-15》

1994年、虫屋たちとの遭遇

指 田 春 喜

たかが虫採り、蝶の採集であるが、こいつにまつわりこれまでに様々なことがあった。自分自身で採集したもので現在手元にある標本の最古のものは、1960年の採集品であるので、この時には既に蝶の採集を行っていたことは間違いなく、今日まで35年間も網を振っていることになる。そして、この蝶の採集を続けて来て、私の心に強く残ること、それはやはり人との出会いである。もちろん、虫を採ること自体楽しいことであり、珍品を採った時のあの手の震えるような感激が虫採りの原点であり、その一点に全てが集約されていると言っても過言ではないと思う。そして、私の場合その蝶は、最初はアサギマダラであり、つぎにオオムラサキとなり、ギフチョウ、オオイチモンジと移り、これは多くの人達とそれほど大差のないものであろう。比較的最近では、フトオアゲハやキャニパルダスオオイナズマにもはずかしながら、やはり少しばかり手が震えてしまった。そして、少年の頃のアサギマダラ、オオムラサキなどを別にすれば、採集の最大興味対象種の移ろいと並行して、多くの人々に出会ったような気がする。そしてその半数以上の人達とは現在でも何等かの交流がある。定期的に会合などで顔を会わせ、時には一緒に採集に出かける人もいれば、手紙や電話での情報交換をするだけで未だに会ったことのない人もいる。また、私が何かの雑誌などに発表した拙文を見て、手紙をくれ、以後は年賀状の交換だけの人。さらには、海外の採集地の案内人やタクシーの運転手、それに毎晩飯を食いに行ったレストランのオカマ(?)もいれば、行った時に泊まると名前を覚えていてくれるホテルのマダムもいる。彼らには前回に行った時に写したスナップ写真を持って行ってやると大変に喜ぶ。そして、マレーシアのフレーザス・ヒルで知り合ったスペインの採集家をはじめ幾人かとは僅かながら標本の交換もしている。振り返ると1994年も何人かの人(虫屋)との出会いがあった。

《春・ギフチョウの巻》

4月上旬には、かねてより手紙や別刷だけのやり取りがある大阪のトリバネチョウコレクターであるS氏が来沢され、彼の銀色のベンツの新車でギフのポイントを2、3ヶ所案内した。教え子であるというベンツの運転手も蝶屋であり、奥方と連れのもう1人の女性、そして私の総勢5人で金沢の郊外でブルーのネットを振った。前夜は、金沢でも屈指の高級ホテルでフランス料理のフルコースと葡萄酒。食後は更に高級ブランデーと我々のサイフとは少し大きさが違うのを思い知らされた。

そしてその翌週には、「多摩虫」会員のK氏が同じく、ギフ狙いで金沢に足を運ばれた。ウィーク・デーであり、大学を抜け出せず、採集にはご一緒できなかったが、夜の金沢の街で東の間であるが、ネオンの採集に同行できたのは私も楽しかった。

4月最後の週末、神奈川は秦野市のT o氏が10年ぶりに我が家に来た。富山に出張があり、その前に北陸のどこかでギフをつまむつもりであったらしいが、彼の日頃の行いのせい(?)かどうか知らないが、日曜日は朝から雨であった。(オレのせいじゃないぜ!) 我が家で標本箱を前に昔話に花を咲かせ、夜は家内ともども痛飲した。

そして5月、ゴールデン・ウィークには、蝶談会の会員ではあるが、現在は米沢市在住のY氏。今度は逆に私の方から押しかけた。彼には、小国のギフと米沢のヒメギフのポイントを教えてもらうだけのはずが、ほとんど手ぶらで行き、その晩我々一家4人でY氏の家に泊めてもらい、夜は当然酒盛り。そして、そこに居合せたY氏の友人のカメラマンA氏はその2週間後、金沢の我が家に顔を見せ、スコッチ・ウィスキーをぐいぐい飲んでいった。

6月。もうギフチョウもう終わりである。雑誌や同好会誌などをパラパラとめくっていたら、富山県は利賀村産の‘山ギフ’が目にとまった。富山のT a氏とは、何度か顔を会わせている。早速電話をすれば、もう遅すぎると言うが、丁寧に金沢からの道順、悪路での注意点、そして何より大事な現地のポイントをご教示された。帰路、庄川畔で賞味した鮎と生ビールは、当日入山した蝶屋のうち、首尾よくギフをネットできたのは私だけということもあり、ことのほか旨かった。

《夏・ラオスの巻》

その後7月は、例年と変わらぬスケジュールをこなし、夏の休暇をどう過ごすかという時に、グループ・多摩虫の会員である東京のE氏から8月中旬にラオス行きの誘いがあった。これまで彼との面識はなかったが、会員でもあり、活字で名前も存じており、手紙で1、2度海外の採集地についての教えをいただいたことがあった。今回のラオス行きのメンバーはこのE氏と私の他に宇都宮のM氏の3名。そしてラオス・ヴィエンチャンには、かつて中国で勇名を馳せたW氏が在住しており、現地での案内をしてくれる由とのことであった。E、Mの両氏とはラオス入りする前夜(8/17)、タイ・バンコクのホテルで初めてお会いできた。

私は8/8に日本を発ち、ラオス入りまでの10日間をボルネオ島サバ洲で過ごしていた。このボルネオ行きについても、仕事が忙しくて十分な準備ができず、取り敢えず手元にある採集記などの文献をコピーするだけでコタ・キナバル入りした訳で、これに天候の悪さが追い打ちをかけ、結果は散々であった。やはり、ポイントをきっちり抑えておかなければダメだというあたりまえのことを再認識させられた。キナバル山周辺では、あまりの蝶の少なさに呆れ採集意欲もなくなり、もはやキナバル山頂を目指すしもなく、40代半ばの70kgの身体を頂上(ローズ・ピーク、4101m)まで運び上げた。結果的にはこれが‘大正解’であり、今夏最大の感激であった。この間にマレー人、中国人、インド人そし

て多くの欧米人と会い、楽しい時間を過ごしたが、これらの人達は虫屋ではないので、このボルネオ島キナバル山登山の話はこのくらいにして、話題をラオスに戻そう。

バンコクよりヴィエンチャン行きの便のチェック・インの際、入国ビザの件でちょっともたつくが、W氏と電話連絡がつき、たいしたこともなく出国。ヴィエンチャン空港には、かのW氏とラオ・ツーリズムのラオス人（後にガイドのK氏と判明）およびW氏の彼女（ラオス人）が出迎えてくれ、入国手続きも極めて簡単。その夜はヴィエンチャン市内最高級（これすなわちラオスで一番）のランサーン・ホテルに投宿。翌8/19より5日間、E, M, W, ガイド（K）、そして私の5人のラオス北部山岳地帯での採集が行われた。

その夜（8/18）、晩飯はガイドのK氏を除く（W氏の彼女を含め）5人で、ホテル近くに鹿のステーキを食べに行った。ラオスはかつてフランスの植民地であったためか葡萄酒、フランスパンなどの食べ物にその名残を留めていた。私の印象に残るその晩の各氏の言動は以下のようである。

W氏：中国・雲南省などの各地でその名を轟かせ、国外追放されたこと、京都在住当時に伝わる強引なウワサとは裏腹に、小柄で物腰が低く、人の話をまず肯定して聞くその態度に驚いた。雲南をはじめ中国に5年、ラオスに既に4年居るとの言であった。行く先々でその顔だちまでもを現地に同化させてしまうその適応力のもの凄さに改めて感心させられた。酒は体に合わず、小食にして、その全てが私にはラオス人に見えた。

E氏：大柄な図体に似合わず、酒は飲まず、コーラを盛んに舐めていた。昔は一升酒も飲んだと言っていたが、これまで一晩に丸々一升の酒は数度しか飲んだことがない私には、酒の味を知る者がそう簡単に酒を止められるとはにわかには信じられなかった。この時はコショウ、ニンニクのよく利いたアツアツの鹿ステーキを問題なさそうにパクついていた。だが、これがいけなかったらしく、その後の1週間ずうっと腹の調子が悪かったらしい。

M氏：氏とはこれまで全くの面識もなく、私は失礼ながらお名前すら存じ上げなかったが、8/17の夜、既に宿泊したバンコクのホテルのレストランでタイ・ビールを飲み、年齢、職業はもとより酒がかなり好きなこと、海外での採集経験などをお互いに語りあい、そこは同好の好しみに直ぐに打ち解けた。それにしても、あの飄々とした風貌とひとの良さは虫屋にはきわめて珍しい。

W氏のラオスの彼女：お会いしていた時間も短く、名前すらお聞きするのを忘れた（TSU I SOには、“コンちゃん”とあるが、実際は“ソンさん”であった）。日本語も良く理解できるようであるが、口数も少なく、極めて控え目である。しかしながら、私は彼女について多くを語る言葉を持たない。

ガイドのK氏：彼については、これまで何人かの日本人虫屋の案内の経験があるようで

あり、かなり色々な事も耳にしたが、私の印象は悪くなかった。ラオス語の他ロシア語、フランス語もこなし、我々との仕事には英語を上手に使う。ラオスがかつてフランスの植民地であり、現在は社会主義国家であるということを割り引いても、これらの4カ国語を操り、コマ切れに開けた経歴からもかなりのインテリのように見た。そして、食事や採集時などに取る我々よりちょっと控え目な態度は仲々好感が持てた。進めれば酒もかなり飲むようであり、軽い冗談もたたく。私は彼との意志の疎通は充分にはかれたし、信頼に足ると判断した。

これまで45年間生きてきたが、また1994年も個性豊かなさまざまな人々に出会うことができた。ああ、これが人生！。まさに『人生は邂逅なり。』よい社会勉強をさせて頂いた。感謝、感謝、そしてまた感謝。

《さしだ はるき 〒920 金沢市材木町8-3》

小 さ な と ま ど い

五 萌 夢 美

「オヤジとさあ、白山行ったときなんかは嬉しくてね、後で何度も夢見ちゃったりして」

「信州へ行く前の晩は、それはそれは楽しみで、興奮してなかなか寝付けなかった」

「初めてオオイチモンジを採ったときは、手が震えて三角紙に包めなかった」

「沖縄で毎日毎日虫を採って、それが初めて採る虫ばかりで、楽しくて楽しくて」

かなたの時代を思いだし、夫の声には自然と熱がこもってくる。

今、休日になると勇んで虫採りに出かけ、珍しい虫を採ったりしても、夫は「大喜び」しているとはいえない。「ヤッター」と思うぐらいには喜んでいるのだろうが、昔のような、天にも舞い上がるようなワクワクした気分や興奮を、味わっていないことは確かだろう。中喜びや小喜びがたくさんある日常に慣れてしまうと、なかなか大喜びができなくなる。それはそれで幸せなのか、案外そうではないことなのか。昔、何か月も前から計画を立てていたその日は、今よりも何倍かうれしく興奮しただろう。けれどそれは、なかなか採集に出かけられない日常を、送っていたからこそなのである。トータルすれば、今のほうが、やっぱり何倍も楽しい思いを味わっているのだろうか。けれど、とまた思う。楽しい環境にあっても楽しいと感じなければ、それは楽しくないのとかわらない、という気もするのだ。

こんな私の思いをよそに、今日も夫は採集に出かけてしまった。まるでかなたの頃の子供のように。小さなとまどい、私が思う以上に夫は感じているのかも知れない。思いの深さゆえに胸の中には何かしら物足りなさ、複雑な思いが残ってしまった。

もつつしんでいる様子。おかしいと思っていれば、第二子が誕生したとの事で、ホッと胸を撫で降ろす。「満里菜」と言うのとパパの顔は途端に緩んでしまうのだった。

自然大好きっ子大集合

澤田氏、自然大好きっ子を集めてアカトンボのマーキングに挑戦。延べ五十人をつぎ込み、2日後にコノシメ、マユタテ、ヒメを再捕獲した。

加賀でカバマダラが大発生

小松昆虫館の館長こと森正俊氏、八月にカバマダラを採集して以来、仕事も忘れて調査に明け暮れていた十月二十八日、カバマダラの集団を目撃。数日後には発生地を発見し、初齢から終齢までの幼虫多数を発見。

小松昆虫館が冬にも

子供達に惜しまれつつ小松昆虫館が十月一杯で休館し、越冬に入った。この昆虫館、かつこ良さとか美しさといっ

た虫の魅力を最大限に引き出す展示法にたけている。三月には展示も新たに目覚める予定で、井沢商会も内容の充実協力している。

超人「中西」カゼに倒れる

「井村」「中西」と言えば、北陸の秘密兵器と恐れられている採集の達人。この二人をたぶらかし、希少種の採卵を企んでいた松井氏であった。ところが中西氏の急病にはかなわず、松井氏自ら木に登るはめになった。

アカシア林のジョロウグモ

この春から徳本氏とNHKのハイビジョンチームが撮影していた内灘海岸のジョロウグモが放映された。今までの定説をくつがえす分散法が映像にとらえられ、徳本氏の長年にわたる苦勞も報われた。

バカマダラの発生消長

一頭のカバマダラが採集された時、一人のバカマダラが生まれた。仕事も手に付かず、

毎日カバマダラを捜して歩いた。月日が経ちバカマダラが消えようかという頃、カバマダラの集団が見つかり、バカマダラは増えだした。カバマダラが消え去った後、バカマダラは生き残れるだろうか。

昆虫総目録作り内業始まる

総目録作りに入って二シーズンが過ぎ、そろそろ取まとめの時期になってきた。文献リストの作成、データの整理等と机上の作業は盛り沢山。事務局では協力の申し出を期待しています。

寒さに耐え抜くカバマダラ

十一月に入り、県内はアラレやミゾレが降る悪天候、あげくは台風級の暴風雨。それでもポカポカ日和には、成虫が飛び、幼虫も日向ぼっこ。

迷蝶は毎年飛来している？

台風が来ず、大風も吹かなかったのに、カバマダラが飛来し、ウスイロコノマも採れた。例年とちつとも変わらな

いのに。もしかすると、迷蝶は毎年飛来しているのに、気付かないだけなのだろうか。

ドイツ箱で家が傾いた

百頭でも二百頭でも、採った蝶はすべて展翅してしまいう指田氏、保有標本数は並じやなく、ドイツ箱の量も並じやない。この重みの為か道楽の為か、家がだいぶ傾いてきたらしく、近々引越すとか。

例会の記録

十月五日(木) 八時から城南管工二階にて開催。

石川県から依頼された昆虫総目録について今後の進め方について話し合う。

その他、ラオス事情ディスコ編、舞茸事情三年七年十三年説、山ギフ事情天生編、オトラカミキリ井村編、迷蝶事情ウスイロ編等と井村・高田のカミキリ同定会。

参加は佐々木、矢田、指田、松井、中西、富沢、高田、徳本、山岸、井村、滝本(見学)の十一人。

会員の動きーしゃばの動き

羽咋に北陸の虫屋が大集合
九月二十三日、上野俊一氏
を招き「能登の昆虫再発見」
と題して講座が開かれた。参
加は関東の虫屋若干と新潟か
ら福井にかけての虫屋。虫採
りや虫の話、虫を肴の親睦会
と楽しい二日間だった。

能登でカバマダラが発生
ウスイロコノマを探してい
た松井氏、能登の神社でカバ
マダラを採集。田圃の中にボ
ツンとある神社林は、ウスイ
ロコノマのポイントだが、た
またま隣接する公園でカバマ
ダラを採集。叢に入ると三頭
が飛び上がり、ビックリ仰天。

あわれオオトラ孔道に死す
毎日幼虫の顔を見ないと気
が済まない。チョウなら良い

が、カミキリだとかちょっと困
難。しかし、会長ともなると
毎日材を削って日々実践して
いる。その結果、幼虫はどん
どん潰され、日の目を見る事
はない。あの日和田のオオト
ラも例外ではなかった。

一泊二日のサドコブツアー
早朝金沢を出発し、佐渡で
コブを叩く。翌日は日和田で
オオトラの材採集。おもしろ
いはずの計画だったが、結果は
サドコブ少々でおしまい。

大笠のメススジゲンゴロウ
大笠山付近富山県でメスス
ジゲンゴロウが採れて久しい
が、石川県では記録されてい
ない。各地で調査されている
が、メススジもヤシャも見つ
かっていない。大笠山の石川
県側に格好の池があり、メス

スジの可能性は高いが、ハー
ドな山行となる。二の足を踏
んでいたが、秘密兵器が動い
た。ヤブコギで池にたどりつ
いた中西氏だったが、目指す
ゲンゴロウの姿は無かった。

博物館設立に新たな動き
自然史博物館設立運動が動
きだして久しいが、目に見え
る進展はない。そこで今秋か
ら一歩進んで、積極的に県民
に理解を呼びかけていくこと
になった。まずは、準備会を
作り、次いで世話人会、専門
委員会と駒を進めていく。

なんてすてきな若返り
つい最近、小学生と中学生
の兄弟が入会したと思ったら、
またまた小学生の入会。しか
も今度は女の子。両親ののめ
り込みようも並じゃなく、今
後が楽しみな坂原親子である。

吉村パパの調子や如何に
ここところ調子が出てき
た吉村氏ではあったが、十月
例会には顔を出さず、採集行

翔

NO. 117

1995年12月10日発行

百万石蝶談会

金沢市大場町東871-15 松井方

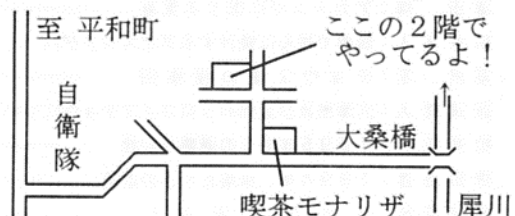
〒920-01 ☎0762-58-2727

郵便振替 00750-8-562

印刷 小西紙店印刷所

例会は偶数月・5月・7月の第1木曜8時から

TEL参加もOKです(0762-44-3318)



会員の動き・しやばの動き

目 次 (117号)

澤田 博：アカトンボに関する覚書	1
松井正人：海岸で盛んに吸汁するアオスジアゲハ	3
富沢 章：チョウ 2 種の採集例	3
諸道秀人：大津市及び近郊のクロコノマチョウについて	4
松井正人：1995年セミの運鳴き記録	4
指田春喜：1994年、虫屋たちとの遭遇	5
五萌夢美：小さなとまどい	8
編 集 部：会員の動き・しやばの動き	10